

# 私の右に、あなたの右に

詩篇 16 篇 1-11 節

## はじめに

今日は、詩篇 16 篇から学びたいと思いますが、詩篇 16 篇は、ダビデと神様の間における信頼が歌われている詩です。ここでは、ダビデと神様の関係が「私」と「あなた」で歌われていきます。その意味で、非常に個人的な信仰が歌われていると言えます。しかも詩篇 16 篇は、「幸い」「喜び」「楽しみ」「安らか」という言葉が出てきて、非常に明るい内容になっています。あまり苦しみとか悲しみとか、そういう言葉は出てきません。

## 1. 私の喜び、楽しみ、安らぎ、幸せを、どこに求めればよいのか

9 節を見ると、「**それゆえ、私の心は喜び、私の胸は喜びにあふれます。私の身も安らかに住まいます**」とあります。心と胸は「喜び」にあふれ、体も「安らか」であると言うのです。つまり、心も体も健やかであり、全人格的に幸せな状態と言えます。

では、なぜダビデは、このような幸せな状態にあるのでしょうか。2 節を見ると、それは、「**あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにありません**」とあります。つまりダビデは、「主」と呼ばれる方を、自分の「神」としているからです。「主」と呼ばれる方を、自分の「神」としているからこそ、ダビデは、心と胸に「喜び」があふれ、体も「安らか」であり、幸せに生きていられるのだと言うのです。だからこそダビデは、11 節でも「**満ち足りた喜びが、あなたの御前にあり、楽しみが、あなたの右にとこしえにあります**」と歌っているのです。

## 2. 主はどのような方か

では、「主」と呼ばれる私たちの神様は、一体どのような方なのでしょうか。

### ① 助言を下さる

7 節を見ると、「**私はほめたたえます。助言を下さる主を。実に、夜ごとに内なる思いが私を教えます**」とあります。主なる神様は、私たちに助言を下さる方です。私たちに語りかけてくださる方です。では主なる神様は、現代において、私たちにどのように助言を与え、語りかけてくださるのでしょうか。それは、神様が造られたすべての物と言えます。「自然」もそうですし、「歴史」もそうですし、私たちの心の中にある「良心」もそうです。それらを通して神様は今も私たちに語りかけています。しかし何よりも明確に、神様が私たちに語りかけてくださるのは、「聖書」の言葉においてです。私たちの信仰は、聖書を生き

た神様の言葉と信じるものです。主なる神様は、聖書の言葉を通して、今も私たちに助言を与え、私たちが何を信じるべきなのか、どのように歩めばよいのかを教えてくださいたいのです。

ダビデは「夜ごとに内なる思いが私を教えます」と言っています。夜は、静まる時であり、一日を振り返る時でもあります。その時に「内なる思い」が私たちに語りかけてくれるのです。神様の御言葉が、私たちの「内なる思い」となって語りかけてくるのです。私は夜によく散歩をします。一日一万歩は歩くようにしているので、昼間あまり歩かなかった日は、夜に30分から1時間歩くようにしています。そこで、教会のこと、家族のこと、自分自身のことを色々と思い巡らしながら歩くのです。時には祈りながら歩くこともあります。そこで神様の御言葉を思い出すこともあります。ダビデが「夜ごとに内なる思いが私を教えます」と言ったように、私も夜の散歩の中で、神様の御言葉と祈りが内なる思いとなって、自分の心が整理されることがよくあります。

主なる神様は、今も「自然」や「歴史」や私たちの心の中にある「良心」を通して私たちに語りかけていますし、特に聖書の言葉を通して私たちに具体的な助言を与えてくださり、私たちを励まし、慰め、私たちの人生を導いてくださっているのです。

## ② 私の右におられる

8節を見ると、「**私はいつも、主を前にしています。主が私の右におられるので、私は揺るがされることはありません**」とあります。主なる神様は、私たちの「右」におられる方です。詩篇の中でも、よく「主が右におられる」という表現が出てきますが、それは、私たちが「救う」「支える」「守る」ということを意味します。主なる神様は、私たちといつも共にいてくださり、私たちを救い、支え、守ってくださるのです。それゆえ、私たちは、たとえどんなことがあっても「揺るがされることはない」のです。ダビデは、自分の「前」にも「右」にも、主が共にいてくださることを信じていました。主なる神様が、自分を取り囲んでいると信じていたのでしょう。主なる神様は、目には見えません。しかしそれでも、いつでも私たちを取り囲み、私たちを救い、支え、守ってくださるのです。

## ③ いのちの道を知らせてくださる

続いて、10-11節を見てみましょう。「**あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に、滅びをお見せにならないからです。あなたは私にいのちの道を知らせてくださいます。満ち足りた喜びが、あなたの御前にあり、楽しみが、あなたの右にとこしえにあります**」。ここには、「よみ」とか「滅び」、「いのち」という言葉が出てきます。ここでは、私たちの死の問題が扱われています。主なる神様は、私たちのたましいをよみに捨て置かず、滅びを見せないのです。つまり私たちを「いのちの道」、つまり「永遠のいのち」へと導いてくださるのです。私たち人間にとって、死の問題は最大の問題と言っても過言ではありません。死んだらどうなるのか？それは、非常に大きな問題です。私たちは、死者からそのこ

とを聞くことはできません。ただいのちと死を支配している主なる神様に聞く他ありません。主なる神様は、ダビデや敬虔な者をよみに捨て置かず、滅ぼさない、「いのちの道」に導くと言われます。聖書では、「いのち」とは神様と共にいることを意味し、「死」とは神様から捨てられることを意味します。「主」と呼ばれる方を、自分の「神」と信じる人は、その意味で「いのち」を得るのです。その「いのち」は、「満ち足りた喜びが、あなたの御前にあり、楽しみが、あなたの右にとこしえにあります」とあるように、永遠に続く喜びがあり、楽しみがあるものです。主なる神様を信じる時に与えられる「いのち」は、決して肉体の死で終わってしまうものではありません。肉体の死の後も、主なる神様は私たちと共におられ、それゆえに永遠に続く喜びと楽しみがそこにはあるのです。

主なる神様は、私たちの最大の問題である死に希望を与えてくださる方です。死は、私たちにとって絶望でしかありませんでした。悲しみや恐れでしかありませんでした。しかし、いのちと死を支配する主なる神様は、死を滅ぼし、死の中にもなお希望を与えてくださったのです。その希望は、イエス様によって明確に私たちに示されました。新約聖書を見ると、使徒ペテロも、使徒パウロも、詩篇 16 篇のこの箇所を引用して、イエス様の復活の預言と見えています。イエス様は神の子であり、私たちの罪を償うために十字架で死なれました。しかしイエス様は、三日目に死からよみがえり、死の力に打ち勝たれたのです。そして今は、天に昇られ、私たちを待っておられるのです。イエス様が、死の力に打ち勝たれ、天国への道を開いてくださったことにより、私たちもまた、「天国への道」つまり「いのちの道」を歩むことができるようにされたのです。イエス様により、死は単なる絶望でも、悲しみでも恐れでもなくなったのです。イエス様によって、死に対する希望が生まれたのです。

#### ④ イエス・キリスト

私たちは、「主」と呼ばれる方を、自分の神とする時、喜びにあふれ、安らかに、幸せに生きることができます。そして、その方から人生における助言を受け、その方がいつも共にいてくださいます。そしてその方が私たちの死の問題にも希望を与えてくださいました。この「主」と呼ばれる方は、二千年前にこの地上に、人としてお生まれになりました。そして、人々に助言を語り、私たちの罪を償うために十字架で死に、死からよみがえり、天国への道を開いてくださいました。そして世の終わりまで、いつも私たちと共にいてくださると約束してくださいました。その方は、「ナザレのイエス」という方です。

イエス様こそ、「主」と呼ばれる唯一の真の神です。このイエス様を、「私の神」とする時に、死を超える永遠の喜び、楽しみ、安らぎ、幸せが与えられるのです。そして人生のあらゆる助言と導き、支え、守りを得ることができるのです。

### 3. 喜びと楽しみ、安らぎと幸せに生きるために

イエス様こそ、「主」と呼ばれる私たちの唯一の真の神様です。4 節を見ると、「ほかの

**神に走った者の痛みは、増し加わります。私は、彼らが献げる血の酒を注がず、その名を口にしません」と**あります。私たちは、イエス様以外を、私たちの「神」にしてはならないのです。日本には、八百万の神がいると言われます。人々は、どんな神を信じてもよいと考えます。しかしダビデは、「ほかの神に走った者の痛みは、増し加わります」と言います。イエス様以外の神に、死を超える喜びや楽しみ、安らぎや幸せ、人生の導きや支え、守りはないのです。

5-6節を見ると、「**主は私への割り当て分、また杯。あなたは、私の受ける分を堅く保たれませぬ。割り当ての地は定まりました。私の好む所に。実にすばらしい、私へのゆずりの地です**」とあります。ダビデは、主なる神様こそ、「私への割り当て分」と言いました。イスラエルの12の部族は、約束の地カナンで、土地をそれぞれ割り当てられました。しかしレビ族だけは、割り当てられませんでした。レビ族の割り当て分は、主なる神様ご自身だと言われたのです。レビ族は、神様への礼拝の奉仕をする部族でした。つまりレビ族は、神様ご自身が支えるということだったのです。土地を持たないレビ族は、自分たちの生活のために、神様を信頼しなければなりません。ダビデが「主は私のへの割り当て分」と言ったのは、私は主なる神様を信頼しますということです。私の生活のすべてを、人生のすべてを、主なる神様に信頼しますということです。

私たちに割り当てられたのは、主なる神様ご自身です。土地や家や財産などは、あまりないかもしれませんが、しかし私たちは、主なる神様ご自身を与えられています。私たちのすべてを満たすことができる全知全能の神様を与えられました。私たちは、主なる神様を持っていれば、それで十分です。この神様が、私たちの必要をすべて満たしてくださるからです。

ですからダビデは8節で、「**私はいつも、主を前にしています**」と歌っています。主なる神様が、私たちの「前」にいるということは、主なる神様はいつも、私たちの先頭に立って歩んでくださるということであり、私たちはその後について行くということでしょう。いかなる道であっても、主なる神様の道に従い、ついて行くということでしょう。また、それと同時に、主なる神様が、私たちの「前」にいるということは、いつも主なる神様と向き合って生きることであり、主なる神様との交わりに生きるということでしょう。

ダビデは1節で、「**神よ、私をお守りください。私はあなたに身を避けています**」と祈っています。主なる神様との交わりに生きるということは、神様に祈りつつ生きるということでしょう。7節でダビデは、「**私はほめたたえます**」と歌っています。主なる神様との交わりに生きるということは、神様に賛美しつつ生きるということでしょう。

またダビデは3節で、「**地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります**」と歌っています。「地にある聖徒たち」とは、神様の民のことです。旧約時代ではイスラエルの民であり、新約時代は教会です。主なる神様との交わりに生きるということは、教会の交わりを喜んで生きるということです。私たちはいつでも、主を前にして、主との交わりに生き、永遠に続く喜びと楽しみ、安らぎと幸せに生きていきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちが暮らしている日本は、八百万の神がいると信じられ、あるいは神などいないと豪語します。しかし、人々のうちに喜びや楽しみ、安らぎや幸せはあるでしょうか。死の悲しみと恐れの中に希望があるでしょうか。私たちは、ナザレのイエスこそ、主なる唯一の真の神様であると信じています。どうか他の神に走ることなく、この方を前にして、この方との交わりに生きることができますように。ただあなたを信頼しますので、私たちの必要をすべて満たし、いつも私たちと共にいて助言と導きを与え、「いのちの道」へと導いてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。